

『失われた時を求めて』第一篇『スワン家の方へ』第一部「コンブレー」

(鈴木道彦訳)

プチット・マドレーヌ

こんなふうにして長いあいだ、夜半に目をさましてふたたびコンブレーを思うとき、私の頭には、ちょうど燃えあがるベンガル花火か電気の光に照らされて、夜の闇に沈んだ建物のほんの一角だけが他と区別されて浮かびあがるように、混沌とした闇の真ん中から切りとられた一種の光っている壁の一部が浮かぶばかりだった。その底辺はかなり広く、そこには小さな客間、食堂、自分ではそれと知らずに私の悲しみの作者となったスワン氏のやってくる薄暗い道の最初の部分、玄関があって、その玄関から私は階段の最初の段の方へと歩いていったわけだが、心をえぐられながら上がった階段は、それだけで、このいびつなピラミッド型のひどく狭い胴体を形成していた。頂上には私の寝室があって、ママンのはいってくるガラスのはまったドアのある狭い廊下がついている。ひと口に言えば、常に同じ時刻に、周囲にあったと思われるいっさいのものから引き離されて、それだけが闇から浮き出ている舞台装置、私の着替えの悲劇にとって(昔の戯曲の冒頭に、地方公演用に指定されているあの装置のような)必要最小限度の舞台装置である。あたかもコンブレーとは狭い階段で結ばれた二つの階でしかなく、またコンブレーには夕方の七時しか存在しなかったかのようだ。本当を言うと、問いつめられれば私にしても、コンブレーにはほかのものも含まれており、

またほかの時刻にもコンブレーは存在していたと答えられただろう。けれども、コンブレーについて私が何かを思い出しても、それは意志的な記憶、知性の記憶によって与えられたものにすぎないだろうし、このような記憶の与える過去の情報は、過去の何物をも保存してはいないから、私には残りのコンブレーを思い浮かべる気もまるで起こらなかったことだろう。そういうものは実のところ、私にとって死んでいたのだ。

永久に死んでしまったのだろうか？ そうかもしれなかった。

すべてこういったことのなかには、たくさんの偶然が含まれている。そして第二の偶然、私たちの死という偶然のために、しばしば第一の偶然の恩恵をのんびり待っていることもできなくなるのだ。

私はケルト人の信仰を、きわめて理にかなったものだと思うが、それによれば、死によって奪い去られた者の魂は、なにか人間以下の存在、たとえば動物や、植物や、または無生物のなかにとらえられている。なるほどその魂は、私たちがたまたまその木のそばを通りかかり、これを封じこめているものを手に入れる日まで、多くの人にとってけっして訪れることのないこの日までは、私たちにとって失われたままだ。しかしその日になると、死者たちの魂は喜びに震えて私たちを呼び求め、こちらがそれを彼らだと認めるやいなや、たちまち呪いは破れる。私たちが解放した魂は死に打ち克って、ふたたび帰ってきて私たちといっしょに生きるのである。

私たちの過去についても同様だ。過去を思い出そうとつとめるのは無駄骨であり、知性のいっさいの努力は空しい。過去は知性の領域外の、知性の手の届かないところで、たとえば予想もしなかった品物のなかにも（この品物の与える

感覚のなかに)潜んでいる。私たちが生きているうちにこの品物に出会うか出会わないか、それは偶然によるのである。

コンブレーにかんして、自分の就寝劇とその舞台以外のいっさいのものが私にとってもはや存在しなくなってから、すでに多くの歳月の過ぎたある冬の一日、家に帰った私がひどく寒がっているのを見て、母は、ふだん飲まない紅茶でも少し飲ませてもらっては、と言いだした。私ははじめ断ったが、それからなぜか、気が変わった。母は、「プチット・マドレーヌ」と呼ばれるずんぐりしたお菓子、まるで帆立貝の筋のはいった貝殻で型をとったように見えるお菓子を一つ、持ってこさせた。少したって、陰気に過ごしたその一日と、明日もまた物悲しい一日であろうという予想とに気を減入らせながら、私は何気なく、お茶に浸してやわらかくなったひと切れのマドレーヌごと、ひと匙の紅茶をすくって口に持っていった。ところが、お菓子のかけらの混じったそのひと口のお茶が口の裏にふれたとたんに、私は自分の内部で異常なことが進行しつつあるのに気づいて、びくっとした。素晴らしい快感、孤立した、原因不明の快感が、私のうちにはいりこんでいたのだ。おかげでたちまち私には人生で起こるさまざまな苦難などどうでもよく、その災厄は無害なもので、人生の短さも錯覚だと思われるようになった——ちょうど恋の作用が、なにか貴重な本質で私を満たすのと同じように——。というよりも、その本質は私の内部にあるのではなく、それが私自身だった。私はもう自分を、つまらない、偶然の、死すべき存在とは感じていなかった。いったいこの力強い喜びは、どこからやってきたのか？ 私はそれが紅茶とお菓子の味に関連があるとは感じたが、しかしこの喜びはそれをはるかに超えたもので、同じ性格のものであるはずはなかった。それはどこから来たのか？ なんの意味か？ どこで

それをとらえるのか？ 私はふた口目を飲む、そこには最初のとき以上のものは何もない。三口目がもたらすものはふた口目よりも少しばかり減っている。やめにするべきだ、お茶の効き目は減少しているようだから。求めている真実が、紅茶のなかではなくて、私のうちにあることは明らかだ。紅茶はその真実を目ざめさせはしたが、それがなんであるかを知っておらず、徐々に力を失いながらただいつまでも同じ証言を繰り返すだけだ——私には解釈のつかない証言、せめてお茶に対してそれをいま一度求め、そっくりそのままそれを見つけたして、決定的な解明のために今すぐ私の自由にしておきたいと願うあの証言を。私はカップをおき、自分の精神の方に向きなおる。真実を見つけるのは精神の役目だ。しかしどうやって見つけるのか？ 深刻な不安だ、精神が精神自身も手のとどかないところに行ってしまったと感じるたびにかならず生じる不安だ。精神というこの探求者がそっくりそのまま真っ暗な世界になってしまい、その世界のなかでなお探求をつづけねばならず、しかもそこではいっさいの蓄積がなんの役にも立たなくなってしまうようなときの不安だ。探求？ それだけではない、創り出すことが必要だ。精神はまだ存在していない何ものかに直面している。精神のみが、それを現実のものにし、自分の光を浴させることができるのだ。

そこで私はいま一度自分に問うてみる、この未知の状態はいったいなんだったのか、と。その幸福感、ほかのすべてのものを消し去るほどのその^{レアリティ}実存感について、何ひとつ論理的な証明がもたらされたわけではないが、しかしそれらが明白に存在することは示された。その状態を、私はもう一度出現させてみたい。私は頭のなかで、紅茶の最初のひと匙を味わった瞬間に後戻りしてみる。私は同じ状態をふたたび発見する、だが新たな光はさしてこない。私は自分の精神

に、いっそうの努力を要求する。逃げ去る感覚をいま一度引き戻してくることを求める。そして、この感覚をふたたびとらえようとする精神の躍動が、何ものによっても挫かれないように、すべての障害物、すべての無縁な観念をとり払い、隣室の物音に対して耳をおおい、注意をそらされまいとする。ところが精神は、疲れるばかりでいっこうに目的に達しないので、それを感じた私は、これまで禁じてきたのとは反対に、むしろむりにも気を紛らせ、精神にほかのことを考えさせ、こうして最後の試みを行なう前に気力を回復させようとする。それからいま一度、精神の前方のものをすっかりとり払って、その目の前にまだ遠くない最初のひと口の味をふたたびおいてみる。と、自分のうちで何ものかがびくっと震え、それが場所を変えて、よじのぼろうとするのを感じる。非常に深い水底で錨を引き上げられたような何かだ。それが何であるかは知らないが、しかしそれはゆっくりと上がってくる。私はその手ごたえを感じとる、その響きが長い長い距離を通して耳に聞こえてくる。

たしかにこんなふうには私の奥底で震えているのは、イメージであり、視覚的な思い出であるにちがいない。それがこの味に結びつき、その味のあとに従って、私のところにまでやってこようとつとめているのだ。だがその思い出は、あまりに遠いところで、あまりにぼんやりとした姿でもがいている。かすかに認められるのは、その鈍い反映だけだが、そこには多くの色彩がかきまぜられ、とらえがたい渦をなして溶けこんでいる。けれども形態は見分けがつかないし、たった一人だけそれを通訳できる者に向かって頼むように、この反映に向かって、それと同時にあらわれた引き離すことのできない伴侶——すなわちあの味——の発する証言を翻訳してくれと頼むわけにもいかない。またどんな特別な状況のなかで、過去

のどんな時期にこれが生まれたのかを、教えてくれと求めることもできないのだ。

この思い出、この昔の瞬間は、私のはっきりした意識の表面にまで到達するだろうか？ よく似た瞬間の牽引力が、はるか遠くからやってきて、私の一番奥底の方で促し、感動させ、かきたてようとしている、この昔の瞬間は？ 分からない。今はもう何も感じられない、思い出は停止している、たぶんまた沈んでいったのだろう。その暗い夜のなかからいつかまた思い出が浮かびあがるだろうか？ だれが知ろう？ 十度も私はやりなおし、思い出の方に身をかがめねばならない。そしてそのたびごとに、困難な仕事や重大な作業と見ればすぐ顔をそむけさせるあの無気力さが、私にこうすすめるのだった、そんなものはやめたまえ、お茶でも飲みながら、苦もなく反芻できる今日の倦怠、明日の欲望だけを考えたまえ、と。

そのとき一気に、思い出があらわれた。この味、それは昔コンブレーで日曜の朝(それというのも日曜日には、ミサの時間まで外出しなかったからだ)、レオニ叔母の部屋に行っておはようございますを言うと、叔母が紅茶か菩提樹のお茶に浸してさし出してくれたマドレーヌの味だった。プチット・マドレーヌは、それを眺めるだけで味わってみないうちは、これまで何ひとつ私に思い出させはしなかった。たぶんあれ以来、食べはしないが菓子屋の棚で何度もそれを見かけたので、そのイメージがこれらコンブレーの日々から離れて、もっと新しい別の日々に結びついてしまったためだろう。たぶんまた、こんなに長いこと記憶の外に棄てて顧みられなかった思い出の場合、何ひとつそこから生きのびるものはなく、すべてが解体してしまったためでもあるだろう。それらの形態は——厳格で信心深いその襞の下の、むっちりとした官能的な、あの菓子屋の店頭小さな貝殻の形も同

様だが——消え去るか眠りこむかしてしまい、膨脹して意識に到達することを可能にする力を失っていたのだ。けれども、人びとが死に、ものは壊れ、古い過去の何もかも残っていないときに、脆くはあるが強靱な、無形ではあるがもっと執拗で忠実なもの、つまり匂いと味だけが、なお長いあいだ魂のように残っていて、ほかのすべてのものが廃墟と化したその上で、思い浮かべ、待ち受け、期待しているのだ、その匂いと味のほとんど感じられないほどの雫の上に、たわむことなく支えているのだ、あの巨大な思い出の建物を。

そして、これが叔母のくれた菩提樹のお茶に浸したマドレーヌの味であることに気づくやいなや(なぜこの思い出が私をこれほど幸福にしたのかはまだ分からず、そのわけを見つけるのはずっと後のことにしなければならなかったとはいえ)、たちまち叔母の部屋のある、道路に面した古い灰色の家が、芝居の書割のようにやってきて、その背後に庭に面して両親のために建てられた別棟に、ぴたりと合わさった(それまで私が思い浮かべていたのは、ただほかと切り離されたこの別棟の一角だけだった)。またその家といっしょに町があらわれた、朝から晩まで、いろいろな天気の下で見る町。昼食前にお使いにやらされた広場が、買物をしにいった通りが、天気のよい日に通った道が、あらわれた。そして、ちょうど日本人の玩具で、水を満たした瀬戸物の茶碗に小さな紙きれを浸すと、それまで区別のつかなかったその紙が、ちょっと水につけられただけでたちまち伸び広がり、ねじれ、色がつき、それぞれ形が異なって、はっきり花や家や人間だと分かるようになってゆくものがあるが、それと同じに今や家の庭にあるすべての花、スワン氏の庭園の花、ヴィヴオンヌ川の睡蓮、善良な村人たちとそのささやかな住居、教会、全コンブレーとその周辺、これらすべてががっしりと形をなし、

町も庭も、私の一杯のお茶からとび出してきたのだ。

(集英社文庫 第1巻 p105～114)